

創立10周年記念

KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA

第8回 春日井市交響楽団 定期演奏会



1999.7.11 (SUN) 15:00開演・14:00開場

春日井市民会館

主催／春日井市交響楽団 共催／春日井市 後援／愛知県教育委員会・春日井市教育委員会・中日新聞社

ごあいさつ

ごあいさつ



春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
鵜飼 一郎

本日、第8回を迎えます春日井市交響楽団の定期演奏会を、市民の皆様とともに鑑賞できますことは、いつもながら私の大きな喜びとするところであります。

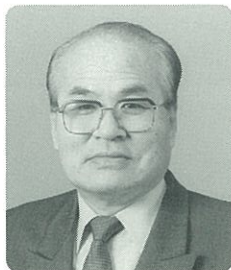
春日井市交響楽団（カポ）は、本年、創立10周年を迎えます。この間、着実な成長を遂げ、質の高い音楽を送り出してまいりました。これもひとえに関係各位のご尽力と市民の皆様の温かいご支援の賜物と心から感謝申し上げます。

「カポ」のこの定期演奏会と、毎年12月に開催される「市民第九演奏会」は、ともに市民参加の本格的なクラシック音楽を楽しめる演奏会として大きな人気を得ております。

今回の定期演奏会もまた、チェロの独奏者に松崎安里子さん、指揮者にベテランの竹本泰蔵氏をお迎えして、カポの10年来の成果が発揮される素晴らしい演奏が期待されます。

それでは、皆様とご一緒に、堂々たるフル・オーケストラの響きと美しいチェロの音色を楽しみたいと思います。

春日井文化の長女と しての市民オケ



春日井市交響楽団
会長

中部大学総長
山田 和夫

ようこそ、第8回春日井市交響楽団定期演奏会においでくださいました。今年で春日井市交響楽団も創立10周年を迎えることになりました。これもみなさまのこれまでの温かいご支援と深いご理解のおかげと感謝いたします。

この秋に、わたしたちが楽しみにいたしております春日井市の総合文化施設「文化フォーラム春日井」が完成します。春日井市の文化は、さらに新しい局面を迎えます。10年にわたる市民オーケストラ活動を経て、私たちは春日井文化の長女に育ったと自負いたしております。これからも活発な音楽活動によって、春日井文化の充実と向上と新しい時代にふさわしい市民文化の創造につとめて参りたいと存じます。

今回の定演もまた、竹本泰蔵先生に指揮をお願いすることができました。精力的でダイナミックな竹本先生の指揮ぶりと長期にわたるご熱心なご指導によって、本日のカポはまた、いつもながらの熱演を展開して参ります。また、ソリストには、団のトレーナーであり、いま最も活躍の松崎安里子先生をお迎えいたしました。ドヴォルザークの地プラハで研鑽を積まれた成果が大いに期待されます。お二人の先生に心からお礼申し上げます。

こうした優れた専門の音楽家のみなさまのご協力を得て、さらにこれからの10年、ファンのみなさまのために優れた音楽の真摯な演奏を心がけて参ります。ますますのご支援とご理解をお願いいたします。それでは、カポの名曲の熱演をごゆっくりお聴き下さい。

プログラム

チェロ協奏曲 口短調 作品104

アントニン・ドヴォルザーク（1841-1904）作曲

第1楽章 快速に（15'）

第2楽章 ゆっくりと・急がないで（14'）

第3楽章 適宜に快速に（14'）

++ 《休憩》 ++

交響曲第6番『悲愴』口短調 作品74

ピョートル・チャイコフスキー（1840-1893）作曲

第1楽章 ゆっくりと — 余り過度でなく快速に（19'）

第2楽章 優美に・快速に（8'）

第3楽章 快速に — とても速く（8'30）

第4楽章 ごくゆっくりと・哀悼的に（11'）

指揮 竹本 泰蔵

チェロ 松崎 安里子

管弦楽 春日井市交響楽団

プロフィール



指揮 竹本 泰蔵 たけもと たいぞう

1956年神戸生まれ。1974年京都市立芸術大学音楽学部作曲科に入学、翌年指揮科に転科し、指揮を山田一雄氏に師事。1977年カラヤン・コンクール・イン・ジャパンでベルリンフィルを指揮し、第2位に入賞。1978年より、カラヤン氏に招かれ、ベルリンフィルの演奏に参加するなど、ベルリンを中心に研鑽を積む。1981年に名古屋フィルのアシスタントコンダクター就任を経て、現在まで、札幌・東響・東フィル・日フィル・名フィル・京響・関フィルなど、全国の主要オーケストラに客演し好評を博す。また、オペラ、バレエなどの舞台公演も数多く、その活動は、宮本亜門演出のミュージカル音楽監督にも及んでいる。近年はトークを交えた「親しみやすいコンサート」にも積極的に取り組み、谷啓、小堺一機、キダ・タロー、羽田健太郎らとの共演など、ジャンルを越えた活動の他、1988年から現在まで、FM愛知の音楽番組「東邦ガス・ホームミュージック」のDJとしても、多くのファンを魅了し続けている。



チェロ 松崎 安里子 まつざき ありこ

滋賀県立石山高等学校音楽科卒業。愛知県立芸術大学音楽学部器楽専攻(弦)首席卒業、桑原賞受賞。同大学大学院音楽研究課程修了。1984年第18回民音コンクール(現東京国際音楽コンクール)室内楽部門において斉藤秀雄賞受賞、同コンクール入賞記念コンサート(東京、札幌、大阪)に出演。1988年カノン合奏団に同行し、ドイツ、オランダ公演を行う。1990年名古屋市民会館主催の新進演奏家紹介コンサートのオーディションにおいて最優秀賞受賞。1990年、1993年に名古屋・京都にてソロリサイタルおよびデュオリサイタル。1991年ソア合奏団とボッケリーニのチェロ協奏曲を共演。アークトリオ(ピアノトリオ)を結成し、1989年、1991年、1992年に名古屋・京都・札幌・岡山にて演奏会。また、アークトリオは、1992年には電気文化会館主催のアンコールシリーズに選ばれ、同年第1回読売音楽奨励賞も受賞。1989年アンサンブル・ソノリタス演奏会。1998年札幌交響楽団メンバーによるイグナツ弦楽四重奏団とシューベルトの弦楽五重奏曲を共演。水口文芸合奏団とハイドンのチェロ協奏曲ハ長調を共演。1995年まで愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、滋賀県立石山高等学校音楽科、各非常勤講師をつとめ、1995年から1998年までプラハにてプラハ芸術アカデミーのミロスラフ・ペトラシュ教授のもとで研鑽を積む。また、中部大学管弦楽団創立時よりトレーナーとして指導にあたっている。県立石山高等学校音楽科非常勤講師。池本成博、天野武子、黒沼俊夫の各氏に師事。

管弦楽 春日井市交響楽団

市民オーケである春日井市交響楽団は、市内の音楽愛好家たちによって、平成2年11月に創立されました。今年で10年目に入ります。「市民が演奏し、市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」で、「カボ」(Kasugai City Philharmonic Orchestra)の愛称で親しまれています。毎年、7月の定演と12月の「春日井市民第九演奏会」を中心に、オーケストラ活動を行っています。団員は、会社員・公務員・教員・主婦・学生・看護婦・自営業からなる60名。演奏する私たちにとって、最大の喜びは、一人でも多くのみなさまに演奏を聴いていただくことです。そのために「有名な名曲の名演奏」を心がけています。先週7月4日、ハーモニー春日井で「カボのファンの集い：カポチーノの会」を開き、定演前の熱の入った練習を見ていただきました。これからも、さらに市民のみなさまに親しまれ、愛されるカボとなるよう頑張りますので、温かいご支援をお願いいたします。(団長 花村浩克)

音楽監督 都築正道 つづき まさみち

1940年名古屋市生まれ。名古屋大学文学部美学を卒業。関西学院大学大学院博士課程修了。「ワグナーの楽劇論：音楽におけるロマン性について」で文学博士。現在中部大学国際関係学部教授。春日井市交響楽団音楽監督。愛環音楽連盟理事長。春日井文化懇話会会長。名古屋オペラサロン主宰。海外の音楽コンクールの審査員をつとめる。主著に「楽劇：音と言葉の美学」「あくびなしの音楽講座：トスカ」

曲目解説

第8回の定期演奏会は大曲二つです。ドヴォルザークの「チェロ協奏曲」もチャイコフスキーの「交響曲第6番：悲愴」も共に、みなさまよくご存知の名曲でしょう。それだけに、特別な緊張感を覚えます。特にソリストには、私たちのトレーナーでありプラハで数年間の研修を終えて昨年春に帰国した松崎安里子さんをお迎えしました。指揮はここ数年ご指導をいただいている竹本泰蔵さんです。カポにとっては最高の共演者であり、指導者です。それに本日もまた満席のお客さま。これで良い演奏が出来ないわけがありません。(都築正道)

チェロ協奏曲口短調・作品104

アントニン・ドヴォルザーク(1841-1904)作曲

協奏曲 残念なことに、ピアノやヴァイオリンの協奏曲に比べて「チェロ協奏曲」の名曲は数えるほどしかありません。古くはボッケリーニに始まり、C.P.E.バッハからハイドン、ロマン派のシューマン、タルティーニにドヴォルザークにフランスのサン＝サーンスにエルガー、新しくヴェータンやウォルトンといったところでしょうか。その中で、最も演奏される機会が多いのがこのドヴォルザークの「チェロ協奏曲」です。低音楽器としてのチェロの魅力を十二分に際立たせるために、オーケストラに低音のチューバとトロンボーンを加えています。そのため倍音に支えられた深い宗教的で内省的な響きがして、この曲を単なるヴィルティオーゾ的な協奏曲の華やかさに陥ることから救っています。オーケストラは決して伴奏を務めるのではなく、まるで交響曲を演奏するように堂々とその立場を主張します。当然主役であるチェロもまた、時には花になり時には蝶になって、その優雅さと美しさと軽快さを誇ります。ドヴォルザークの協奏曲におけるチェロとオーケストラの共演こそ、まさに「協奏(お互いを尊重し讃え合う)・共奏(一緒にアンサンブルを楽しむ)・競争(激しく技術をしのぎ合う)・競走(クライマックス目指してテンポの速さを競う)・狂騒(快楽に生きる)・強壮(エネルギー)・凶相(失敗したとき)」といった「キョウソウ」の同意語をすべて併せ持つ特異なものががあります。ドヴォルザーク55歳の1896年3月、作曲者の指揮イギリスの名手レオ・スターンのチェロで、ロンドンで初演されました。大成功でした。

第1楽章：(快速に) 口短調・4/4拍子・ソナタ形式 [15']

低音楽器のチェロが「テーマ」です。クラリネットの低い柔らかな響きがまず私たちを温かな落ち着いた世界へ導いていきます。スラヴ的に暗いチャイコフスキーの「交響曲第5番」の導入部と良く比較されますが、この柔らかなさや暗さや温かさや落ち着きは、ヴァイオリン協奏曲やピアノ協奏曲にはない、チェロ協奏曲ならではの特性です。第1主題それ自身が変奏曲になっていて、第1小節の動機を第3小節で変奏しています。



ブラームス同様変奏曲を得意とするドヴォルザークな

らでは面白さですが、交響曲第5番「運命」におけるベートヴェンの明快な「主題労作」(Thematische Arbeit)の手法と違って、短い動機を変奏の網で絡めていくので、どれがどの動機の変奏なのか分からず、なかなか油断ができません。こういった細部における自律的で巧妙な曲の構成がこの曲を知能的で洒落たものになっています。そうかと思うと突然荒々しいスラブ風の舞曲に変わり、民族的な土着のエネルギーも感じさせます。「どうだい、私は素朴な田舎の陽気な親父といったところさ」とドヴォルザーク本人は言っています。

第2楽章：(ゆっくりと・急がないで)

口長調・3/4拍子・三部形式 [14']

ここでもクラリネットのソロで始まります。そして、上昇するアルペジオの長い手で主役のソリストを誘います。いわゆる「協奏曲の危険なエア・ポケット」です。ソリストがこの空間を埋めなければなりません。チェロはまずアルペジオのエコーでそれに応えてから、美しく抒情的な歌で空間を飾ります。主題は彼の歌曲「ひとりにして」(作品82)からの借用です。故郷にいる彼の義理の妹で初恋の人であったカウニツ伯爵夫人ヨセフィナが重い病でいるのに、アメリカにいる彼は見舞いに行けません。その思いを歌ったのだといわれています。フルオーケストラが短調の和音を力いっぱい響かせて、新しい情熱的な中間部を作ります。

第3楽章：(適宜に快速に)

口短調・2/4拍子・自由なロンド形式 [14']

「帰国の喜びを表す行進曲だ」ともいわれますが、そういった標榜的なものを想像するよりも、ロンド(円舞)形式による「スラヴ舞曲」です。ドヴォルザークは、チェロの技法や効果を同郷のチェリストのハヌシュ・ヴィーハンに訊きました。ドヴォルザークは、有益なパートナーであった彼にこの曲を捧げましたが、初演はスターンでした。ヴィーハンが、終楽章に技巧的なカデンツを入れるよう主張してドヴォルザークと対立したためといわれています。ドヴォルザークは、オーケストラとソリストの「キョウソウ」による緊張感を大切にしたいかったのです。作曲を終えたあとの1895年5月に、ヨゼファが亡くなりました。終楽章の最後を再び「私を独りにして」の主題による60小節のコーダに書き直しました。チェロの美しい高音の響きが、魂の安らぎを語っています。

交響曲第6番『悲愴』口短調・作品74

ビョートル・チャイコフスキー(1840-1893)作曲

三つのパッション 交響曲第6番『悲愴』は、チャイコフスキーの死の年(1893年・53歳)に作曲され、完成した翌月の10月28日に彼の生誕の地ベテルブルクで作曲者自身の指揮で初演されました。彼はこの曲を出版するときに、一度思いついた『悲愴』という題を最終的に撤回しました。特定のタイトルを避けたのは、正しい処置であったと思われます。なぜなら「悲愴」という題が見事にこの曲の核心をついているだけに、逆にチャイコフスキーの意図した「音楽による謎」を言葉によって解消してしまう恐れがあるからです。ロシア語の「悲愴」(Pateticheskyy)の語源は「バトス的なもの」、すなわち「情熱(パッション)